



金子光晴全集



第五卷

金子光晴全集 第五卷 著者金子光晴 裝幀者司修 発行者高
梨茂 印刷者山田博 発行所東京都中央区京橋二丁目一 中央公
論社 電話(五六一)五九二一 振替東京二―三四 ©一九七六

昭和五十一年九月十日印刷
昭和五十一年九月二十日発行



詩

V

目次

花とあきビン

5

塵芥

97

詩拾遺

139

詩劇

383

指鬘外道

385

時計は止っても時は動いている

401

奇妙な乗船者

419

後
記

花とあきビン



花とあきピン 目次

月とあきピン

7

あきピンを選ぶ人の唄

23

机のうへのいっぽんのあき

ピン

26

戦争で生きのこった一本の

ピン

45

短詩（三篇）

74

半ダースのビール場の兄弟

が、海をあくがれて旅に

出たといふ、かなしい童

話を、詩ものがたりにし

て、つくりあげた古風な

詩を一つ。

短詩（三篇）

87

80

エビローグ
後跋

月とあきビン

酔の氣もない、魚醬にょくまむが入れてあつた惡臭ののこり香もないからっぽのビン。

ビンの内部と、ビンの外との、はだはだな氣流。
溫濕の錯落。……ビンのなかで縊れた花は、
くらりと首を垂れて、生色は失せ、

また、外側では、突風が唸り、砂礫を飛ばせ、
ビンのまはりを迂って、
東と、西にそれる。

その風に翼もつれる渡り鳥。
Zincの海の、白い波がしら。

あをぞらと鹽とで、ぎしぎしと磨かれたピンは、
曇まじりの雨と、泪なみだや、鼻水はなみづでよぐれたピンは、

ささくれた皮膚の剥めくれる痛さと、蟻かきがらの傷に沁つみ入るつめたさと、
出生のあるに甲斐なさで、渺かに人間の存在つなと繋がる。

たとへ、うすよぐれた嗽き水にせよ、いっぱい詰ってゐてこそそのピンなのか。
異物をまじへず、からっぽであるほうが、純粹なピンのありやうなのか。
いまの僕には、判断がつきかねる。

“からピンのことなどで、それほど、氣を揉むことはあるまいに……”
と、日頃つきあひのある人たちも、それほどでない人たちも、
みるにみかねて、助言をしてくれる。

“その通り”と、僕もうなづくのだが、そのうへまた、人間の日常にまで割込んできて、
ずいぶん、邪魔つけであるばかりか、

利巧ぶった人間と、正義の味方の小聰しいピンとが、妥協だげふしあふ奇妙な風景が、

遠近を欺き、現實をはぐらかせ、屈折がつくるきらきらした映像を、

小さな破片^{かけら}にまで、一つ一つのせてゆさぶりながら、

ペンダントのカメオの横顔のやうに、見せびらかせて遠退^さかる。

それにしても、あきビンを透かせてながめる太陽の

いつも蟲づるんでみえることよ。

タールを塗った街路樹と、こはれた木椅子と、

まるめて捨てた紙屑が、落葉と先を争ふ。うら淋しいけしきが、

活動寫眞のやうにめまぐるしく、とりとめもない僕らの情事の末端までも映してみせる。

喜劇と銘うつこともしないで。

つねに疎略にされがちなビンは、ゆすぎが足りず、

内と外がすっかり見透しなどといふことは、めったに望めることではない。

ビンの胴體の、まろみのついた硝石の分厘のあつみこそ、

内と外の相容れない異質な世界の、絶對拒否を支へ、

その固い靜謐が、破滅のきつかけの時間を計量^{はか}つてゐる。

ビンの表面は、ときには、寢汗、ときには、手あかのおぶらでぬらめき、

黄ろい膽汁、血のまじった尿。^{カンタリス・チンキ}斑猫丁幾の熱病と、腋臭の分泌液で
もち添へる暇もなく、この手を亡^なつて、ピンは逆様に、顛落する。

ビンの内と外がふれあへるのは、いたましいことではあるが、

そのピンが、こなごなに壊れる時をおいてほかにはない。

ビンの外周をめぐる、吐く息の霧でくもらせるものと

うちから押しつける色褪せたしろい唇のひび割れを追ふものと。

一枚の硝子をへだてて、内外のこころのぬくみ、

體溫をふれあふことはできるとしても、

たとへば、眼と眼がさがしあて、指先でこつこつと合圖などしても、

ビンの内外では、存在が一つになることは未來恆、不可能といってもいい。
交叉することのない面の並行の無限大のひろがる先は、氣も遠くなるばかりで、

遠心分離器で、宇宙の外へ放逐した不用な雜説とくらべるまでもなく、

過去、現在、未來をつなぐ人間のいのちをつなぎあはせた長さをいくつもってきても、

到底、測れることではない。硝子一枚で、みえてありながら、

かよひあへないもどかしさは、生死の隔絶よりも救はれない。

——およそ、人と人とのつながりは、あひだに硝子の薄膜でもへだてなくては、
自他のけぢめも成立たず、血は滾り、一つ鍋のわが臟腑はくつがへる。

存在に戻る機會を失くした、神妙さうな『死』と較べて、

『生きる』といふみせかけな時間は、

格闘も、愛撫も、遠眼には、ただまぎらはしい手足のもつれあひで、

花の息づき、枝の撓ひのなまめかしさにはかならず、

ひと春の花の盛りも、手籃てかごのまま、次の世代にわたすためにそこにゐる。
つきつぎの観衆といれかはるため、人は順ぐりに、

おのれの席を立て、ゆづらなければならぬ。

それにしても僕らの背後のふえる、——生殖はんしゅくによる人間の氾濫はんらんと、地球を變質するイデオ
アの腐蝕力。

おなじく一つの鑄型に入れて、生産されるピンは、

日常の人のくらしに間に合せるのがせい一杯だ。

酒や、清涼飲料や、化粧水などの、ほどよい容器いれものとして。

使用ようのすんだあきピンを、人は、勝手にどこへでも棄てるので

もはやこの地上では、あきピンを押しわけ、倒すことなしに

一足も先にすすむことはできなくなった。

われたあきピンによく氣をつけて！

柔かい素足の足のうらで、割れたピンの、尖った破片かけらを踏んだりしないやうに！

砥ぎたての刃物よりも鋭利なあきピンの、民族、國家につながる選民精神が、ひしめきあつて編隊をつくり、寝入りばなの、あるいは、幾夜不眠つづきの僕らの頭上を、

足踏みとどろかせて、低く、高く、暴走するものを、
迎へてはやりすごした恐怖の夜、晝をどうして忘れられよう。

つづけざまに落ちる爆弾、焼夷弾に、逃げ惑ふひきつた笑ひ顔も、ピジャマもぬいだ裸ピンも

救助網あそのうへの道化のやうに、いちどきに宙に放りあげられる。

そんな危急の場でも、人間はふえつつける。

よその兒と取違へぬやうに、足裏に名を書いたあかん坊は、

アンゴラの毛絲玉のやうにかるく、

母に抱かれて、産院から運び出され、

また、順々に盛装したピンや、包装されたピンが、ながれ作業に乗ってひっそりと、

ふれあって立てる音も、泡のはじけるかすかさで、

うす眼をひらいた僕の眼の前を通り、しらぬまに

打^ダ入^スに入れて、あたりの空間を埋めつつ、上へ、上へ、ぎっしりと積みあげられ、

高層ビルの谷底から僕は、商品の高さをみあげる涯に

そらの寂寞^{じやくまく}と、一輪の山茶花^{さざんくわ}のはかなげな微笑^{ははえみ}をさがす。

ピンとともに連れ去られた人々は、

ふたたび戻ってくることはないのか？

ピンもからっぽ、人も空^{から}骸^{がい}で、どぶ河をながされたはて、

ピンはのこるが、

人は、死ぬ。

地上がいつでも清浄なためには、種の繁榮も、歴史も無用で、

人の理想も、物質^{モノ}の變^{メタモルフォーイズ}身^ミも、なんの意味もあるわけではない。